

救急医療現場からの「悲鳴」

救命救急医療の現状と課題



夜中に急に胸が苦しくなった…

休日、子どもが急に発熱を起こした…

そんなときにすぐに診てくれるお医者さんは
本当に心強く、安心できるものです。

命に関わるような重症の病気やけがの場合、
「救命救急センター」で診療してもらえます。し
かし、今この救命救急センターは大きな問題を
抱えています。

※医療のレベル

- | | |
|------|--|
| 1次医療 | 頭痛、腹痛、風邪、下痢などといった一般的によく見られる病気を的確に診断し治療する医療。開業医などで対応。 |
| 2次医療 | 地域の中規模～大規模病院で行われる病棟医療。比較的症状が重い患者に対し設備を生かした医療を行う。 |
| 3次医療 | 大学病院や高度専門医療施設で行われる。生命に直結する重度の疾病に対するいわゆる高度先進医療を施す。 |

初期夜間急病診療支援室 スタート

古田肇岐阜県知事が視察



初期夜間急病診療支援室を
古田県知事が視察（4月11日）

関市の医療体制整備の視察と、地域医療を支える病院スタッフの激励のため、中濃厚生病院を訪れました。



◆こうした医療連携による診察体制の整備は、岐阜市、大垣市に次いで県下で3番目となります。

救命救急センターの過酷な状況を少しでも緩和するために、4月7日、救命救急センターと武儀医師会、そして関市が協定を結び、中濃厚生病院内に「初期夜間急病診療支援室」を設置しました。

これは救命救急センターの設備を使用し、平日の午後8時～10時の間、急病の小児患者らへの診療を武儀医師会の内科・小児科医などの開業医が行うものです。この支援室の開設によって、軽症患者への対応は円滑となり、また救命救急センター本来の目的である24時間の3次救急医療体制の充実も図られ、「安全で安心なまち」の実現にまた一歩近づきます。

お医者さんへの上手なかかり方や救急車の正しい使い方を、今一度考え、市民の手で、医療体制の整ったまちを作りましょう。

そして、安心して暮らせるまちを

子どもたちの世代に引き継ぎましょう。

◆子どもの急な病気で困ったときは

電話 小児救急電話相談
#8000（局番なしでプッシュ）
または ☎ 058-240-4199

◆夜間などの急病の場合は、こちらでも医療機関を紹介していますのでご利用ください。

電話 救急医療情報センター ☎ 23-3799

インターネット

岐阜県広域災害・救命救急情報センター
<http://www.qq.pref.gifu.lg.jp>
携帯 <http://qq.pref.gifu.lg.jp/i/>

武儀医師会

からの 提言

救命救急センターの現状や抱える問題、そして救急車の出勤に関わる問題など、今の関市の救命救急医療の現状をふまえ、武儀医師会の早川力会長にお話を伺いました。



現在の医療の傾向と問題

最近では病気や症状に対するさまざまな情報が入手でき、患者さんも「専門医に診てもらおう」という傾向にあります。そして中濃厚生病院を初めとする総合病院が充実してきたために、本来、入院や重症患者に対応する総合病院に患者さんが集中しているのが現状です。そして、夜間や休日でも対応できる救命救急センターにおいても、こうした患者さんが増えつつあり、このままの状況ではいざ救命救急センターもパンクしてしまう危険すらあります。救命救急センターの担当医師は過酷な勤務状態で、本来の救命救急医療にまで影響を与えかねません。

市民の皆さんへの提言

こうした状況を理解し、適切な医療機関の利用をお願いしたいと思います。



大切なのは「かかりつけ医」を持つことです。市内には多くの開業医があります。各家庭でかかりつけの医師を持つことは、家族の健康を守るためにも重要です。例えば夜中に突然症状が現れたり、調子が悪くなったときでも、すぐに



「かかりつけ医」に電話して相談してください。患者さんの健康や命を守るために最善の方法を尽くし、適正な判断で対応します。時には病院と連絡を取り、病院へ搬送することもありますが、そのために普段から病院と医師会は綿密な連携をとっています。

開業医の先生は、自分が診察した患者さんは責任をもって、24時間いつでも見守っています。そのためにも「かかりつけ医」を持ち、軽い症状であればまずは「かかりつけ医」に相談してほしいと思います。

市民の皆さんが、救命救急センターを適正に利用し、救急車を適正に利用することは、将来の関市の医療体制を充実させるため、そして自分のために大変重要なことなのです。

区分	患者数計	内									
		科	小児科	外科	整形外科	脳外科	皮膚科	泌尿科	産婦人科	眼科	耳鼻科
入院	4452	2068	2	1192	224	743	70	96			57
外来	19439	5496	7027	572	2724	1099	620	609	93	292	907
計	23891	7564	7029	1764	2948	1842	690	705	93	292	964
1日平均	入院	12.2	5.7	3.3	0.6	2	0.2	0.3			0.2
	外来	53.3	15.1	19.3	1.6	7.5	3	1.7	0.3	0.8	2.5

▲平成18年度 中濃厚生病院救命救急センター利用者状況 (単位：人)

中濃厚生病院・救命救急センター

救命救急センターとは

特に症状の重い第3次医療患者(※)に対して、救命の医療を行うもので、救急隊など救急患者の搬送機関と連携をとって救命医療を確保することを大きな使命としています。救命救急センターでは12人の医師と42人の看護師、その他にも薬剤師やレントゲン技師など総勢64人のスタッフが交代勤務により24時間体制で対応しています。

救命救急センターの利用状況

平成18年度の救命救急センターの受入状況は、1年間に1万9439人の外来患者を診察し、1日平均53・3人が利用したことになります。特に注意して見なければならぬのが、その内訳で、すべての外来患者のうち5496人(28・13%)が内科、7027人(36・15%)が小児科の患者が占めています。また、このうちおよそ9割は軽症もしくは中等症(第1次医療患者※)の患者で、開業医などといった1次医療機関でも十分に診療できる患者なのです。

救命救急センターの課題

救命救急センターでは、最近こうした比較的軽症の患者の利用が極端に増加しています。そのために、救命救急センターで対応しなければならぬ症状が重い患者への対応の遅れにつながりかねません。また、過酷な勤務体制や患者数の急増など、担当する医師への影響も出てまいります。つまり、本来、救命救急センターが受け持つ命に関わるような2次・3次医療が損なわれる可能性が出てきたのです。

救急車の利用状況

関市では中濃消防組合の所管する救急隊によって緊急患者の搬送を行っています。しかし、この救急車の出動においても、大きな問題が起きています。救急車の出動は年々増加傾向にあり、過去10年間でおよそ1・56倍となっています。その内訳は、特に急病による出動が平成10年には全体の半分だったのに対し、平成19年では約3分の2にまで増加しました。

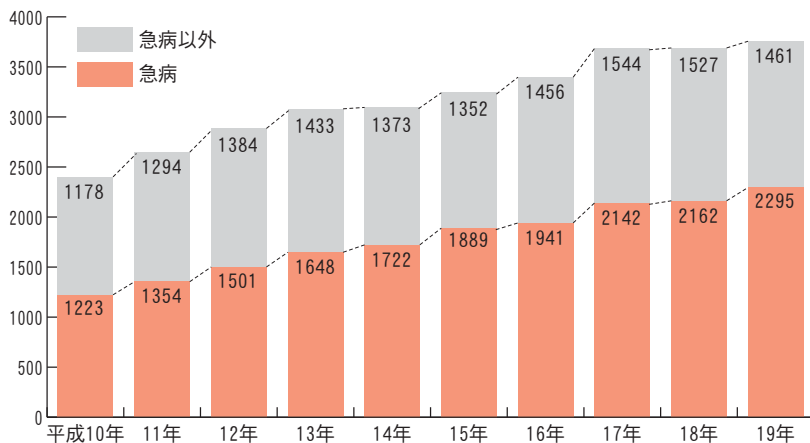
そして、救命救急センターの利用者と同様に、救急車の利用者も中々軽症患者が圧倒的に多く全体の81・0%を占めています。(中濃消防組合 平成19年1月～12月の出動状況による)

救急車出動の課題

救急車は関消防署に2台、西分署に1台と各出張所に1台ずつあります。救急隊は出動の要請があると24時間いつでも現場へ駆けつけ、速やかに医療機関へ搬送します。命に関わるような大けがや急病、交通事故などさまざまなケースがありますが、なかにはこんなものがあります。「救急車で病院に行けば待たなくても診てもらえる」、「どここの病院に行ったらいいのかわからないのでとりあえず救急車を呼ぶ」、「病院に行きたいけど足がない」など…。

中濃消防組合関消防署・救急隊

救急隊は使命と責任のもと、要請があれば必ず出動し最善を尽くします。1回の出動で署に戻るまで平均40分、1時間程度かかります。それゆえ、安易な救急車の要請によって本来の目的である緊急な出動に支障を来たすことも起こりえるのです。



▲救急車の出動件数の推移 (参考：H19年消防統計)